

社会福祉法人・学校法人 イエス団



イエス団報

Jesus band news

2017/12/24

20

再刊 20 号

- 豊島神愛館リニューアルプロジェクト「mamma」
- 研修報告
- 施設紹介
豊島ナオミ荘
真愛ホーム
- 人物探訪
真部 マリ子さん
(元天隣乳児保育園園長)
- トピックス
みどり野保育園 園舎改修
甲子園二葉幼稚園 新館完成
幼保連携型認定こども園 友愛幼児園スタート
沖縄平和研修
- J.B.フェローズ活動報告
- イエス団の輪っ
田村三佳子さん
倭 実咲さん
根口 京子さん
北川 理恵さん
杉本 基晴さん
- 表紙写真の解説
- 編集後記
発行：2017年12月24日
発行者：黒田 道郎
編集・発行：
社会福祉法人・学校法人 イエス団
〒651-0076
兵庫県神戸市中央区吾妻通 5-2-20
TEL：078-221-9565
FAX：078-221-9566
<http://www.jesusband.jp>



ミッションステートメント2009

わたしたちイエス団の実践は、1909年12月24日の賀川豊彦の献身に始まる。そして、イエスの愛に倣い、互いに仕えあい、社会悪と闘い、新しい社会を目指して多くの協働者とともに今日まで歩み続けてきた。この歴史を検証し、働きを引き継ぎ、今、わたしたちはイエスに倣って生きる。

わたしたちは、いのちが大切にされる社会をつくりだす
わたしたちは、隣り人と共に生きる社会をつくりだす
わたしたちは、違いを認め合える社会をつくりだす
わたしたちは、自然が大切にされる社会をつくりだす
わたしたちは、平和をつくりだす



2009年12月24日



豊島神愛館全景 ビフォー

豊島神愛館リニューアルプロジェクト

豊島神愛館が新しく生まれ変わりました！

1939年に賀川豊彦は、結核を患ったがお金がないために病院で治療を受けることもできず、苦しい状況に追いやられていた結核患者の療養のために、豊島神愛館を建設しました。その豊島神愛館は様々な事情により1年後に閉鎖されますが、賀川豊彦は豊島を福祉の島にしたいと考え、売りに来られたらどんな土地でも購入していったそうです。ですので、今も賀川豊彦が購入した土地がイエス団の土地として数多く残っています。

1937年より坂出で塩田労働者家庭の乳幼児保育所坂出育愛館を運営していた吉村静枝さんは、戦後、戦争孤児である8名の乳児の子育てに奔走されていました。食糧もろくに手に入らない時代に、子どものいのちを守るために苦慮されていたところ、賀川豊彦から豊島に渡るとミルクも食糧も手に入るの、豊島に行けば良い。サナトリウムであった豊島神愛館を使って生活すれば良いとの助言を受けました。そこで、吉村静枝さんは、8名の子どもたちを連れて、豊島に移り住み、子どもたちを養育するようになりました。1947年のことでした。これが、のちに香川県唯一の乳児院豊島神愛館のはじまりです。その後、島の人たちにも支えられ、1000人以上の子どもたちを養育されてきました。

香川県で唯一の乳児院である豊島神愛館は、常駐の医者がないこと、離島にあり交通アクセスが悪く、家族の面会が容易ではないことから、坂出への移転を決断しました。

しかし、島の人たちからは「神愛館は島の誇りだ」「私たちが子どもたちを育ててきたんだ」「神愛館がなくなると寂しい」との強い思いがあることを知りました。そこで、イエス団としては神愛館は移転するが、これからも島の人たちと協働して、豊島が「福祉の島」として再生し、そこに住まわれる方々がより豊かに幸せに暮らすことができるしくみをつくろうと、2011年12月より豊島の島民の方々と「豊島の福祉を考える協議会」を立ち上げました。

「協議会」では当初、豊島の課題を整理し4つのプロジェクトチーム、(①高齢者②ビジネス創造③学び・育ち④お接待)をつくり、島の方々を中心に議論を重ねてきました。

2015年からは、4つのプロジェクトチームで検討してきた課題を集約する形で、神愛館の跡地利用に焦点を絞って話し合いを続けてきました。

そこで提案されたことは、以下のような内容です。

- ① 研修や福祉プログラム参加者や観光客が宿泊できる場が欲しい
- ② お風呂をつくって、宿泊客だけでなく島民の方にも利用してもらう
- ③ 宿泊客と島の人々が交流できる場としたい
- ④ 豊島の福祉の歴史や賀川豊彦のことを伝えていく場としたい

これらの意見をもとに、豊島神愛館の子羊館の改修を進めていくことになり、2017年8月1日に竣工式が執り行われました。

子羊館は豊島ゲストハウスmammaとして生まれ変わりました。運営は岡山県西栗倉村で地域おこし事業を展開されている村楽エナジーさんに委託しております。

法人としては、横山利明さんを豊島担当職員として派遣し、新たな福祉プログラム実現に向け歩みを踏み出したところです。

このようにイエス団と関係が深い豊島に是非とも一度訪れてください。ステキな出会い、気づき、学びが与えられますよ。

イエス団常務理事 平田義

豊島神愛館リニューアル！

豊島神愛館は香川県の瀬戸内の離島「豊島」にあります。賀川豊彦の精神を今に残し、人情にあふれ人が豊かに暮らしています。今ではお隣の直島とならんでアートの島としてもその名を耳にすることもあるかと思えます。

そんな離島にイエス団施設である豊島神愛館があります。2015年までは戦後間もないころから続く香川県唯一の乳児院として役割を果たしました。離島ゆえの課題、建物の老朽化、子どもの置かれている社会状況の変化やそれに対する乳児院の使命など考え、乳児院の機能を香川県坂出市に移転することになりました。

そんな中、2011年豊島の福祉を考える協議会が発足しました。豊島

神愛館の跡地利用も含め、豊島の10年後の福祉を考えようということで、島民の方々も含め活発に議論を交わしてきました。

そして、2017年8月には豊島神愛館の一部を利用し、豊島ゲストハウス『mamma』が完成しました。

m a m m a

どんな存在も、ありのまんま、
母のような愛をもって受け容れあいたい。
わたしたちがこれから新しくつくっていく場を
「mamma（マンマ）」と名付けました。

(mamma HPより)



ゲストハウスの運営は村楽エナジー株式会社に委託、快く受けて下していました。岡山県は西粟倉村で、廃業となった温泉旅館を新たにゲストハウスとして見事によみがえらせた会社です。『元湯』という当時の屋号を残し活動し、地元からも愛され、また地域の活性化にもアクティブに取り組んでいる組織です。

豊島神愛館の建物の改修工事は、自分たちでできる部分は自分たちで。mammaスタッフ中心に安部アトリエスタッフやその他島内外のボランティア、イエス団スタッフも協働作業をしました。

雨の日も、暑い日もDIYに明け暮れる毎日。建物の大きさとその歴史の偉大さに触れる。そして、日に日に仲間が増えてゆく。地味な作業もポジティブに変換し、SNSなどで呼びかけ仲間集め。時にはそのままパーティをする日も。いつも前向きな彼らの働きに感心させられました。

クラウドファンディングを活用し、遠方からでも応援してくださる仲間集めも始まりました。当初目標には到底到達しないかと思われていたのですが、mammaスタッフの丁寧な豊島紹介やありのままの想いを綴る文章などにより、最終日に目標を超える応援が集まりました。

当初春にオープンする予定になっていましたが、宿泊、銭湯、飲食と今までにない大掛かりなプロジェクトを前には、工事業者は多くの労力と人員を投入していただいたものの、行政とのやり取りなど大変時間がかかり、春のオープンには間に合いませんでした。



オープンが夏になったことを思うと、その苦労は多大だったかと。

設計をはじめとし、そのすべてを管理、調整していただいたのが安部アトリエさんです。

芸術祭には豊島に『島キッチン』をつくり、アートと食と人とを結びつけました。島キッチンはいまでも豊島で愛される場所の一つになっています。



その他、ここには記しきれないほど多くの方々が関わって出来上がった建物です。mammaもまた、豊島で愛される場所になってゆくと感じています。

オープン後、子どもたちの夏休み時期には、海外在住のアーティスト(minahamada & zosen)によるワークショップがあり、子どもたちと一緒に、古くなった建物の外壁を思い思いにペイントしました。

ポップな仕上がりは、見た人の気持ちを明るくさせてくれます。いろいろな色がお互いちょうどよく同居しているのは、社会の多様性を示しているかのようにも見えます。また一つ豊島神愛館のシンボルができました。



豊島神愛館の活動は、今後、mammaだけにとどまらずに進んでいきます。豊島の課題のみならず、現代社会が抱える課題にも取り組んでいければと考えています。この豊かな島で、だれもがあらまのまに過ごすことができる場所を作りたいです。

社会には生きにくさを抱える子どもや家族がいます。その人たちの声はとても小さいもので、ここ豊島からつながりを見出してゆくことは難しいのかもしれませんが。しかしながら、豊島神愛館の新たな使命の一つとして、そういった方々とつながりをもち、それぞれの居場所を作ってゆければと思います。

豊島には賀川豊彦の精神を引き継ぐ、イエス団の施設『豊島ナオミ荘』と『瞳保育所』があります。離島ならではの魅力にあふれた場所です。豊島神愛館は、mammaや豊島ナオミ荘、瞳保育所また地域の方々とともに進んでゆきたいと思います。

皆様も豊島にお越しの際は、新たな歩みの一つであるmammaにも是非お立ち寄りください。

本部事務局 横山利明



研修会報告



新任職員研修会

2017年3月27日（月）～3月28日（火）
於：六甲山YMCA

2017年度一泊新任研修は、今年も自然豊かな六甲山YMCAで行いました。この日の六甲は小雨が降り少し寒かったですが、寒さに負けず、新任職員5名、講師1名、理事3名、スタッフ7名、フェローズ9名、総勢72名が、共に祈り、共に学びました。

研修は「イエス団の理念を理解し、職員としての使命を考える」、「感じる、考える、気づく、伝える、聴く、分かち合う事の大切さを学ぶ」、「新しい職場に入っていく準備をする」の3つを目的に進められました。



グループワークの様子

開会礼拝では、神戸イエス団教会牧師 上内鏡子理事から『神の国をめざして』と題して「イエス団の始まり」、「教会の働き」についてメッセージをいただきました。

参加者と共に：新任職員研修会

2日目のセッションで、平田義常務理事、田村三佳子園長から日々の実践を通して「イエスに倣って生きる」ということはどういうことなのか、イエス団が何を目指し、何を考え、大切にしているのか、私たちは「愛」をもって、一人ひとりに関わり、違いを認め合いながら、子どもたち、高齢者、障がいをもたれた方、また地域の方々を大切に、笑顔で援助していくことがイエス団の職員としての使命であるということをお話していただきました。

講師にお迎えした、シチズンシップ共育企画代表の川中大輔さんとは共に多くのセッションを体験しながら、自分を見つめ、自分に気づき、分かち合う事の大切さを学びました。



先輩職員のお話を真剣に聞いています

今年も各施設から参加していただいたフェローズの皆さんは、さまざまな不安をかかえて研修に参加した新任職員の心の支えとなってくれました。またフェローズ自身も振り返りと共に、新たな学びを得ることができた良い研修であったと思います。

研修の最後の閉会礼拝では、黒田道郎理事長から「わたしが選んだ」というテーマでメッセージをいただきました。

その後、辞令交付式では一人ひとり宣言した「ミッションステートメント2017」を胸に、理事長から辞令を受け取りました。

この2日間の研修は中身の詰まった思いあふれる研修であり、新任職員の方が新しい職場へ一歩踏み出す『勇氣』と『元氣』と『笑顔』をもらえた研修となりました。



今回参加のフェローズ

報告：企画委員会 研修担当チーム
瞳保育所 所長 三谷 恭子

ブラッシュアップ研修会

2017年6月9日（金）～10日（土）
於：六甲山YMCA

- 目的
- 1) 今の自分を見つめ、これからの課題を探る
 - 2) 現場での体験を出し合い、仲間と共有する
 - 3) 「イエス団で働くこと」の意味を理解し、深める

1日目

開会礼拝（奨励：甲子園二葉幼稚園 田村三佳子園長）

セッション1 「仲間との出会い」

” 2 「MS2009とわたしの仕事」

” 3 「『いま』の仕事の中のわたし」

2日目

朝のつどい（奨励：シチズンシップ共育企画 代表／

龍谷大学社会学部 専任教員 川中大輔さん）

セッション4 「『これまで』のわたしと仕事」

” 5 「わたしの仕事とキリスト教」

” 6 「『これから』のわたしと仕事」

ミッションステートメント発表

閉会礼拝（奨励：平田義常務理事）

1日目

開会礼拝の際に「どんなにきみがすきだかあててごらん」という絵本を田村園長が読んでくださいました。ホッとする優しい絵本でした。その時間辺りから、緊張していた参加者の皆さんの表情も少しずつほぐれてきたようで、その後のセッションでもグループでの活動がありましたが、それぞれの思いを出し合い、とても意味のある良い時間で

あったと思います。



私の施設のハッピーニュースを発表する参加者

2日目

昨年と同様、金魚鉢方式のフリップディスカッションで、スタッフが順に「キリスト教は私の仕事にどう影響しているか」を話しました。

その後、話を聞いて屋台方式の語り合いとして、それぞれスタッフとの語りの時間を過ごしました。

参加者の皆さんはそれぞれ、色んな思いで仕事をされています。悩みもいろんな形で持っておられ、そのことが話をする中ですごく感じられました。皆さんにとって、とても大切な思いであるということを感じ、私なりの言葉で話をさせていただきました。

最後には、それぞれのミッションを発表。2日間の研修で感じ、思ったことに見えてきたものをこれからの仕事などに活かすには・・・皆さんの思いをこめた、決意を聞かせていただきました。



M.S. 2017を発表する参加者：ブラッシュアップ研修会

私自身、今回ブラッシュアップ研修のスタッフとして参加させていただき、皆さんの思いに大きなエネルギーを感じました。これからこのエネルギーが職場で、また皆さん自身に活かされることを願っています。

報告：企画委員会 研修担当チーム
聖浄保育園 園長 峰 浩美



第3回全体主任研修会

2017年7月7日(金)

於：賀川記念館礼拝堂

全体主任会が始まって3回目となる今年は、“どの施設にも生きる話がいい！”ということで企画され、第1部はウォーキングスタイル&足育アドバイザーの安藤恵子さんをお招きし、「一生自分の足で歩くための大人の足育」というテーマで講演して頂きました。



「一生自分の脚で歩くための大人の足育」安藤 恵子先生
前半は知識として“足のことを知る”。

○足のトラブルと原因 ○足の構造を知る ○自分の足の形を知る
○自分の足のサイズを知る ○自分の靴を見直す ○買う時のポイントと正しい靴選び という具合で、スクリーンで画像も拝見しながらお話を聞きました。

後半は“実際に動いてみよう！”ということで、自分の靴紐を結び直すところから始まりました。

○立位 ○O脚体操 ○肩まわし そしてついに“歩き”に至りました！

普段何気なく行っている“歩く”という行為ですが、日々繰り返されるこの“出来て当たり前”の行為を今回は丁寧に見直す機会となり、日頃いかに自分の体と向き合っていないかを思い知らされるとともに、体が資本の私達だからこそ、時には自分の体をふりかえりいたわることも大切だと感じました。

第2部は「日頃の仕事についての分かち合い」をテーマに、グループワークを行いました。まずは各自現在悩んでいることをグループ内で発表。それぞれの悩みや思いを聴き、お互いにアドバイス等をもらって明日からの活力へとつなげました。同じ立場にたってそれぞれの現場に臨んでいる仲間からの言葉は、やはり本当に何よりのパワーになります！！



参加者でグループワーク

最後に、黒田信雄企画委員会委員長より、「主任会の必要性」ということでお話がありました。

各施設を見た時に、主任を見ればその施設が動いているのかが分かると。そんな重要なポジションにいる主任達がしっかりと法人を理解し、法人の組織の中の一員であることを意識していけるように、この会が開催されることになったとのことでした。

そして「イエス団の保育」についてもお話がありました。これは「各施設が共通してもっているものをまとめたもので、当たり前のことを文章化しただけ」とのことですが、「自分達のやっていることが外れていないか、ふりかえりの場所としてほしい」との特別な思いがこめられていました。見学者等が来た時に“私たちはこのような保育をしています！”と胸をはって言えるようにと…。この保育理念の中にはこれまでたずさわってこられた方々のたくさんの思いがつまっています。職員一人ひとりがそれを心にとめて、利用者の皆様に接していきたいと思います。

このように、たくさんのあたたかい気持ちにつつまれたこの会に参加させていただけたことに感謝しています。これからも全体主任会が様々な意味で、各施設を支える主任達のパワー充填地となり、イエス団の一員としてまたそれぞれの働きに還元できるようにと思います。

報告：一麦保育園 主任保育士 小関里美



リーダーシップ養成研修会ステップⅠ

2017年9月14日（木）～9月16日（土）

座学：在日韓国基督教教会館（KCC）

フィールドワーク：生野の街

社会福祉法人愛信福祉会 愛信保育園

NPO法人サンボム 在日コリアン高齢者支援センター 大池庵サンボム

NPO法人うり・そだん デイサービスさくらんぼ

NPO法人出発（たびだち）のなかまの会

先日、サウナに入っている時です。僕以外の3人組の方々の話がずっと耳に入ってきました。年齢は66歳から68歳で、子ども時代からの話でした。“当時は食べ物がなく、いつもお腹を空かせていた。ポケットには塩を忍ばせながら、道々にある畑の野菜を勝手に取って食べ、見つかると逃げた。いつも誰かが肥溜めに落ちていた。肥溜めに落ちると名前を変えなくてはいけない。3回落ちた奴は一周して同じ名前に戻った。”そんな昔話でしたが、当時を生きてきた人たちの歴史を感じ、同時にKさんのことを思い出しました。

Kさんは、自分の思ったことは行動され、気に入らないことがあれば容赦がない、はっきり言うと「対応が難しい人」です。

Kさんも同じ時代を生きた現在67歳の方です。Kさんは在日朝鮮人2世で、15歳で家を出て働かざるを得なかったのです。その後、結婚されて三人の子どもができたが、夫は働かず、酒を飲むと暴力を振るい、Kさんは子どもを連れて逃げるしかありませんでした。子どもたちはまだ、7歳、4歳、1歳でした。ただ4歳の子どもは生後8ヶ月の時に髄膜炎を発症し、生きていくうえで24時間介助を要する「重症心身障がい児」でした。命を守り生きていくために三人を施設に預け、働く以外の道はなかったのです。当時、在日外国人には母子家庭や障がい児への福祉手当は全くなかったからでした。

今年度も一昨年から同じ大阪生野で2泊3日の研修がおこなわれました。知っての通り、生野には多くの在日朝鮮人の方々がおられます。研修スタートと同時に聖公会生野センター総主事、呉光現イエス団理事から話を聞きながら街を歩きました。研修会場に着くと、今歩いて来た街やそこに住む人々の過去のスライドを見せてもらい、1世の方から当時の話を伺いました。2日目は保育園、高齢者施設、障がい者施設に分かれて現場で体験しました。3日目は、1日目からの経験を自分たちに根付かせていきました。その作業を講師である川中大輔さん（龍谷大学社会学部専任教員）に3日間通して進めて頂きました。



聖公会生野センター総主事呉光現さんと在日一世の金順奇さん

人や地域にはそれぞれに歴史があります。あらためて歴史を知ろうとすること、正しく知る大切さ、そこから学び、今の自分にできることは何なのかを考えます。

Kさんはその後生活基盤ができ、7歳と1歳の子どもの二人とは一緒に暮らせるようになりました。しかし、4歳の重度の障がいのある子どもは体も弱く長くは生きられないと医師に言われ、どうすることもできませんでした。しかし、2008年にKさんは周囲の反対を押し切り行動に出ました。息子を施設から退所させて自宅に引き取ったのです。思いつきや勢いではなく、その思いをずっと抱き続けて「今しかない」と決断されたのです。息子は33歳になり、それは30年ぶりのことでした。

今、自分たちの目の前にいる人は、困った人なののでしょうか？果たしてKさんは面倒くさい人なののでしょうか。むしろ社会が、日本がそのように強いてきたのではないのでしょうか。どんなに制度や仕組みができて、必ずそこからこぼれ落ちてしまう人たちはいます。それが見えていないだけではないのでしょうか。いや見えにくくされていて、気が付けば自分たち自身も実はこぼれていくことになっているかもしれない。



グループでのふり返し、共有

ミッションステートメント2009の「社会を変えていく」働き。自分たちもKさんのようにその思いを持ち続けながら行動にどう移していけるのか。リーダーシップ養成研修会ステップⅠではそのための多くのきっかけが、たくさんの出会いや学びの中からあらためて与えられました。

今年でKさんと息子さんの生活も10年目に入りました。

報告：企画委員会 研修担当チーム

京都市南部障がい者地域生活支援センター「あいりん」

相談員 太田正人

『2017年度の研修会をふり返って』

今年も多くの出会いがありました。

研修に参加して下さった皆さま、フェローズの皆さま、地域の方々、そこで働くスタッフの皆さま、コーディネートして下さった皆さま、そして研修スタッフ…。この一つひとつの出会い―神さまとの出会い、一人ひとりの出会い―により、多くの学びと感動がそこにありました。参加者の皆さまにとっては、きっと研修の場に参加されたことが、何かの始まりとなったことでしょう。

どうぞこの出会いを大切に今後もそれぞれに与えられた場で励んでくださればと、スタッフ一同願っています。「わたしたちは、いつでも皆さまの応援団です」そして、皆さまのことが「大好きです」

報告：企画委員会 研修担当チーム チーフ

甲子園二葉幼稚園 園長 田村三佳子

施設紹介

豊島ナオミ荘

データ

〒761-4461 香川県小豆郡土庄町豊島家浦 43-10

TEL : 0879-68-3131 FAX : 0879-68-3132

<http://www.ans.co.jp/n/naomi/index2.html>

今日も観光客がナオミ荘の前に自転車を止め、「わー！すごい！きれい！」と感動の声を上げているのが聞こえてきます。2010年から始まった瀬戸内国際芸術祭の影響で小さな島に大勢の観光客が訪れるようになりました。



スーパーやコンビニもなく、台風や濃霧の時は島に閉じ込められることもあります。この身近に当たり前にある自然がとても素敵な物だと感じられているように感じています。

ナオミ荘は海が見える小高い場所にあるので眺め（特に夕日）は最高です。建物の中央にあるホールを挟み、東西に長い平屋建てに60代から最高103歳までの30名の方が生活されています。



老人ホームが欲しいという島民の要望により、前例がなかった時代に法制度を動かすことから始まり、困難を乗り越えて全国で3番目に出来た小規模特養です。

豊島神愛館がお年寄りのお世話をされていたという事もあり、島民も香川県もイエス団に託してくれたのではないのでしょうか。



30年の間に増改築もあり、現在ではデイサービス（定員10名）ショートステイ（定員3名）事業も行っています。これらの方々を総勢26名の職員（豊島在住19名、小豆島在住5名、高松在住2名）でお世話させていただいています。

春は地域との交流もあるお大師参りや小中学校の運動会へ参加、夏には多くの方々のご協力を受け窪保育所との合同夏祭りを開催、秋になると島から出て岡山で夕食や買い物をするなど、利用者さんと職員の絆を深めています。



施設行事である敬老会やクリスマス会では利用者さんのご家族を招待し、バイキング形式の食事やボランティアによる踊り、職員による出し物、利用者さん自身による楽器演奏など、ご家族や職員も共に楽しんでいます。



さて、誰しも明日の事はわかりませんが、体が動かなくなったり、昨日のことが思い出せなくなれば大変な不安を感じるのではないのでしょうか。まだ経験していない私たちは、このような不安を少しでも解消できるよう、手探りで利用者さんと向きあっています。

なかなか思いを汲み取る事は難しいのですが、だからこそ日々のお世話の中で笑顔に出会えると、「この日この時を生きて欲しい、喜びや悲しみに静かに寄り添ってほしい」と強く感じます。それは、私たち自身の明日への力にもなっています。



来年ナオミ荘は30年を迎えますが、常に利用者さんの笑顔があふれ、島民に愛される施設であるために、日々その方にとっての幸せとは何かを考え、目の前の人間を、そして命を尊重していきたいとします。明日も笑顔と感謝の気持ちでがんばるぞ！

相談員 竹中昌三

神戸高齢者総合ケアセンター真愛

データ

〒 651-0077 兵庫県神戸市中央区日暮通 5 丁目 5-8

TEL : 078-251-7000 FAX : 078-251-7020

<http://www.shin-ai.biz/>

私たち真愛は、1996年10月、特別養護老人ホーム真愛ホームを開設し、これまで、在宅サービス（ショートステイ・デイサービス・居宅介護支援事業・訪問介護・小規模多機能型居宅介護・地域包括支援センター・高齢者向公営住宅生活援助員派遣事業・サービス付き高齢者住宅）と入所サービス（くもちホーム・たきやまホーム）の数々の事業を展開して参りました。そして、地域の方々を初めとする、多くの方々のご支援を頂き、2016年10月には、開設20周年を迎えることができました。

20年間真愛は、『地域ニーズに応えた高齢者福祉事業』を念頭に、多様なニーズに応じた事業を展開してきました。社会構造の変化に伴い、高齢者にかかわる様々な課題が注目されていますが、真愛は、住み慣れた地域で安心した生活が継続できるように、在宅、入所サービスが連携して、課題解決に向けた取り組みを実践していきたいと考えています。

高齢者介護が抱える課題の一つに「介護人材の不足」という深刻な課題があります。この課題への対応策として、2008年から経済連携協定（EPA）による介護福祉士候補生の受入れが開始されました。真愛では、2015年、フィリピンから2名の候補生を受入れ、2017年もフィリピン人候補生1名の受入れを予定しています。3名の候補生は介護職として真愛で働きながら、日本語を学習し、介護福祉士合格を目指していきます。



EPAに基づく外国人介護福祉士候補生の受入れは、人材確保という視点だけでの受入れではありません。日本で介護を学んだ外国人が将来、出身国の介護における啓蒙者になるという人的資源育成の視点と、就労現場での日本語教育が組織内のコミュニケーションを活性化し、日本人介護職の人材育成にも繋がっていくという視点を捉えているからこそ、真愛は、今後も介護福祉士候補生の受入れを進めていきたいと考えています。

また、2015年からは、外国人技能実習制度の活用を視野に、社会福祉士介護従事者海外派遣プロジェクトに参加しています。今日まで、ベトナムに職員を派遣し、看護大学や老人ホーム等の視察と試験的な講義を実施してきました。

2017年からは、定期的に介護に関する講義を看護大学で実施することが決定しましたので、真愛職員とベトナムの看護学生との国際交流を開始する予定です。



私たちが多様なニーズに応え、安定したサービスを提供し続けるためには、人材の育成と確保が最重要の課題です。今後、現職員の育成と定着率向上と同時に、外国人介護職の育成も取り組んで参ります。そして、地域の実態と変化に柔軟に対応できるサービスの提供を目指して邁進していきたいと思っています。

特養相談員 吉田太一



人物探訪 元評議員 真部マリ子さん

真部マリ子

まなべまりこ

1927年1月20日生まれ

元 天隣乳児保育園・たんぽぽ保育園園長



イエス団報では、賀川豊彦先生のキリスト精神を継承された先達の方々を紹介してまいりましたが、賀川先生の生前の姿をご存知の方が圧倒的に少なくなってまいりました。賀川先生と直接触れ合った方からお話を伺うことで、賀川先生をより身近に感じられればと願い、今回は2007年まで天隣乳児保育園とたんぽぽ保育園の園長として、また園長を退かれた後もイエス団にかかわり続けてくださった真部マリ子さんにお話を伺いました。

赴任のきっかけ

1965年武内雪園長（武内勝先生のご夫人）の時に、刈谷主任保育士の産休代替として天隣乳児保育園に勤めたのがきっかけで、1966年1月から1991年まで保育士として24年間、その後、2007年までは、天隣乳児保育園と、たんぽぽ保育園（神戸市西市民病院内の院内保育園で1986年4月よりイエス団が運営。2007年3月閉園）の園長としての重責を16年間、いつも守りに支えられて果たすことができました。長い歩みの中で忘れる事が出来ないのは、やはり、あの阪神淡路大震災で園舎が倒壊したことでした。

阪神淡路大震災

まさか神戸があのようになるとは思いもしませんでした。1995年1月17日の大震災で倒壊した天隣乳児保育園。『どうして私の時に…』と恨んだりもしました。

何よりも地震の時間が早朝だったので死者やけが人が一人も出なかったこと。あれがもう少し遅ければ…と思うと。

ももとの天隣は、3階が天隣で2階が神視で、1階は建設費返済のために梱包会社に貸して 있었습니다。1階が陥没し出入り口の階段も、がれきの山となってしまいました。つぶれかけの非常階段から入り、やっとの思いで実印、通帳などを取り出しました。



保育は当然中止、園内立ち入り禁止の貼紙をし、御蔵小学校、公民館、区役所などの避難所へ近所の子どもの安否確認に出向きました。電話でも安否確認をして、連絡が取れた子どもは3人。門に取り付けてあっ

た安否箱で5人の無事を確認しました。さくら銀行上沢支店で1月分の給料を支給。10日ぶりに職員が揃い、励まし、抱き合った事を覚えてます。

震災復興

同じように被害を受けられた梱包会社が、『子ども達が1日も早く戻ってくるように』と、園舎復旧に快く協力してくださったこと。神戸市の特別のお計らいで、倒壊園舎を速く撤去することができたこと。神戸市をはじめ、私立保育園連盟の方たちの職員達への配慮で、どこかの園で子ども達に関わりが持て、希望をもって復旧を待つことができたこと。地域の方たちが（震災で、これを機会に保育園がどこかへ行ってしまわないのではと）心配して、『私たちの大切な保育園がどうか早く再開できるように働きかけてほしい』と神戸市との話し合いの場で言うてくださった温かい思いやりに、嬉しくて、慰め励まされたことを覚えています。本当にうれしかったです。それまで色んなことがありました。怒鳴られて足を蹴とばされたこともありました。でも長い交わりの中で分かっていただけて、そういうふうに言うていただけたことがものすごく嬉しかったです。40年にわたる保育園での生活の中で、本当に忘れる事の出来ない嬉しかったことの一つです。どれだけ励まされたことかと思えます。



旧園舎では園庭がなく、運動会も私の前の武内裕一園長（武内雪園長のご子息）の時は、マイクロバスで明石のほうに行っていました。ものすごく悪い条件だったのです。子どもの遊び場は屋上で、人工芝を敷いていましたが、夏のプールは人工芝が熱くて水をかけたりしながらしていました。赤ちゃんなんかは手洗い場で沐浴をしたりして色んな苦勞をしました。

村山盛嗣先生にはいつも親身になってくださって、役所に行くときはいつもついて来てくださいました。村山先生が、『神戸市にたった一つの乳児保育園だから大事にしないといけない。』と神戸市に掛け合せて、『なぜ乳児保育園が必要かという事を文章に書いて出すように』と仰って、書いて提出したこともありました。『僕と真部さんと天隣は復興したんだ』というも仰ってくださっていました。本当によくしてくださり、私一人の力では絶対できなかったと思えます。

1997年3月29日に新園舎竣工感謝式を挙行了しました。復興して一番うれしかったのは、狭いながらも園庭ができたことです。乳児が1階の部屋になったので、すぐに園庭に出られるのが良かったです。

設計の時に松井設計士さんに、『運動場をもうちょっとこっちに広くして』とか、『子どもがはだしで出られるように芝生にして』などと要望しました。狭い園庭に花をいっぱい植えて、私が全部植えて世話していました。年に2回は植え替えしました。退職してからも何年かは植えに行っていました。

震災から復興までの出来事を思い返す時、私たちの思いを超えた、計り知れない神の恵みと、感謝の気持ちでいっぱいになります。



たんぽぽ保育園

たんぽぽ保育園では新園舎の建替え、竣工感謝の集いなど、園長になってすぐの大きな行事でした。病院側からは塩見文俊院長、志田心庶務課課長、看護師総師長はじめ、数名の看護師さんたちが制服（白衣）のまま参加され、手元に置かれた聖書を開いて、讃美歌を歌って共に心に残る感謝の時を持つことができました。

大震災で、たんぽぽ保育園も一時休園となり、5年後再開しました。そして7年後、ちょうど私の退職と同時に、病院側の都合により閉園となりました。最初から関わり、そして最後まで寂しいながらもきちんと締めくくりが出来たことが良かったと思います。

賀川先生との思い出

私の父と母が若い時から一麦寮に住み込みで伝道していました。母と賀川ハルさんと、吉田源次郎先生の奥さんとは神学校の同級生で、そのような関係で、賀川先生が、『マリア様からマリ子』って名前を付けてくださいました。

賀川先生は色に難しい方で、紫色が大好きでした。それから雑草や野草も大好きで、一麦寮の埴生操先生が野草の研究をされていて、野に咲く花が大好きでした。

埴生操先生とは、一麦寮で一緒に住んでいました。賀川先生もよく来られ、賀川先生の部屋は2階の一番奥で決まっていました。

ある日、母と埴生先生が薪でお風呂を沸かしている時、『おいしいおすしが食べたいなあ』って話しているのを偶然賀川先生が聞いて、あくる日にちゃんとおすしを買ってきてくださいました。

私はそこから女学院に歩いて通っていました。そこは牧師の子女は授業料が免除されていて、賀川先生は私のこと『免除してくれ』って頼みに行くと仰るので、私たちは『それだけはやめてください、わたし勉強もそんなにできないし、牧師の娘でもないから』と、母も『それだけはやめてください』と言ったら、『言うてくる』と仰って行ってしまわれました。個人的にもとっても優しくしていただきました。

私の母は、小学校で音楽の先生をしていました。私が10歳の時、父が亡くなって、それから母は一人で苦労して育ててくれました。家でオルガンやピアノを教えていました。自分の着物なんかは1枚も買わないのに、私には革靴も履かせてくれました。汚い格好をさせるのは嫌だと言って。おしゃれな母でした。

最も印象に残っているのは、結婚して主人の里の四国で暮らしている時、私が母に「神戸に帰りたい」と言っていると、『賀川先生が高松の小学校に伝道に行かれる』ということをも母からの手紙で知って、訪ねていきました。賀川先生と再会すると、握手をして『マリちゃん！こんなとこに居ったんか！』とものすごく喜んでくださいました。

『主人は四国で体育教師をしていて、仕事の事もあります。神戸に帰りたいのです。』と言うと、賀川先生は武内勝さんに言って、住まいを用意してもらって、職業安定所の所長だった緒方彰さんに『真部さんが神戸に帰りたいと言うとから、仕事を探したってくれ』と頼んでくださり、それで川鉄の世話してくださいました。

賀川先生はすごく早く動いてくださって、母から手紙が来て、『花隈に住むところが用意できたから、すぐに帰ってきたい。』と知らせてくださいました。

賀川先生が花隈に泊りに来られた時、そこはお風呂がないので『真部さんお風呂に行こう』と主人と一緒に銭湯に行っていました。『真部さん、ぼくが背中を流したる』と背中を流してくださると、ものすごく上手で、交代で背中を流し合いをしたそうです。

主人が（私に）『何とかしてくれ、賀川先生ステテコが破れとる』というので、新しいステテコを買って知らん顔して、『これはかして』と渡したこともあり。そんな思い出があります。

子ども達は幼児洗礼を受けて、主人も一緒に賀川先生から洗礼を受けました。花隈から帰られる時には、子どもに必ず小遣いをくださいました。『アキちゃん』と言って、当時の1,000円を手渡してくださいました。1,000円くださるけれども、自分の事にはお金はお使いにならない。（下着も破れているし、いつも賀川服。武内勝先生もそうでした。）

賀川先生が生きていらしゃったら、私が長田で働いているのをものすごく喜んでくれたらいいなと思います。

花隈から川鉄の社宅に住むようになってからは、もう賀川先生は花隈には来られなくなりました。ある時、賀川先生がトントンと肩をたたき『（社宅は）陽は当たるか？一軒家か？』と尋ねられ、お答えすると『わかった』と言って去られました。それが最後の会話となりました。その後、賀川先生は四国伝道の時に倒れられました。とても優しい先生でした。

イエス団職員に引き継いでもらいたいという事は？

そんなおがましいことよう言いません。ただ私がしてきたことだけを言うのが精一杯です。

でもやっぱり、乳児保育の精神を大事にして、その気持ちをいつまでも持ち続けていただきたいです。その命がとても大事だということを常に心に留めて、今一番自分が大事にしたいと思う事は何かをよく考えて、それに向かって、そんな気持ちで事に当たってほしいなと思います。

お話を聞かせていただいて

『いろんな人の協力があって、助けられたんです。22年間、震災の復興から頑張ってきたけど（神視とひとつになって乳児保育園が無くなることはちょっと）残念やね。これも時代の流れなんやと思ってます。』と天隣の名前がなくなることを寂しそうにされていたのが印象的でした。

天隣乳児保育園と一体化してあとを引き継いだ神視保育園は、そして命を預かっている私たちイエス団のすべての職員は、その気持ちを大切にしていかなければならないと改めて感じました。

10の質問をインタビューさせていただきました

- 好きな言葉／「イエスキリストは昨日も今日もとしえまでも変わらず。」「主御自身があなたに先立って行き、主御自身があなたと共におられる。主はあなたを見放すことも見すてくこともない。おそれてはならない。おののいてはならない。」この聖句はいつも励まされました。
- 嫌いな言葉／人を非難する言葉
- 好きな音／静かな音
- 嫌いな音／思い浮かばない
- 好きな手触り／庭いじりが好きだから、土とか、お食事を作るのも好きだからそんなのも好き
- 嫌いな手触り／別にないわ
- 保育士にならなかったら／考えたことないわ
- なりたくない職業／職業は考えたことないわ
- 好きな色：／赤もピンクも、賀川先生が好きだった紫も好き。どんな色でも好きだけどね。ピンクとか、年取ったら明るい色が好きになるわね。若い時はスマイレとかブルーとか白紺とかが好きだったけど、色も年齢によって変わりますよ
- 天国で神様に何と言われない／お前、ようやったな。お前なりにがんばったな。と色々なことを許してもらいたいと思っています

トピックス

みどり野保育園 園舎改修完了

「建築」は保育環境を改善していく一つ的手段

新しい「保育所保育指針」の第1章総則の1「保育所保育に関する基本原則」の中に「(4) 保育の環境」という項目があります。「**保育の環境には、保育士等や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、更には自然や社会の事象などがある。子どもの生活が豊かなものとなるよう計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない**」とされています。当たり前のことですが、改めて子どもの育ちにとって与えられた環境が如何に重要であるかということが強調されています。



一般的に保育園の「建築」(建替や改修等)は、工事中はもちろんのことその後も40年も50年も長い間、子どもの日々の生活に直結するだけでなく、保育をする保育士にも多

大な影響を与える一大行事と言えます。また、建替の場合、長い時間をかけて積み立てた自己資金を取り崩し、福祉医療機構等から大金を借入することから一般的には20年以上も、毎年相当の返済をしていかなくはなりません。いろんな意味で、「何十年にも渡って大きな影響を与え続ける建替や改修に対しては、本来もっと計画的に時間をかけて検討すべきではないか」と考えています。



多くの場合、建築に携わった経験のない施設長が指揮をとることが多いのが現状で、それでも建築が進んで行ってしまうのは「建築士」などの「専門家」といわれる方々いるからです。ところが、ここに陥穽がありそうです。「こんな筈ではなかった。」「思っていた出来上がりとは違う。」「施工が雑」「追加工事で予算から費用が大きく膨らんだ。」などよくあることですが、より深刻なのは建築の知識や経験がないがゆえに「出来上がりに対して適切な評価ができない」ことではないでしょうか。表向きの意匠が綺麗に仕上がったことに満足し、見た目ではわからない設備などに大きな落ち度があったなどはよくあることです。多くの場合、施主(施設長側)の短期間に得た知識による主観的判断がその満足度を左右するといってもいいかもしれません。その意味では「**建築士(設計事務所)の力量ができあがりの明暗を左右するものと考えています。**」



当園の改修を進めるに当たり重要だと感じたことは、「**現場の保育士と、どれぐらい計画のプロセスを共有できたか**」ということです。プロセスの共有は、保育を見直す機会になるのみならず、眠っていた数々の備品の整理や処分や保育の環境構成再編、安全やこれまで不自由していたことの洗い直しなどを行い、そのことを喧々譁々話し合う「**プロセスが保育士同士の共有理解と結束力が高める**」からです。今回、保育をしながらの改修工事でしたので、保育や事務スペースが制限され、騒音や粉じんなどに苦しまれながらも、保育士たちが創意工夫をして、工事(2016年11月~2017年3月)を乗り切ってくれました。



建築は、広い意味での「**保育環境を改善していく一つ的手段**」でしかありません。結果も重要ですが、そのプロセスが重要です。保育士一人一人が「私たちの保育園にはこんな特色があるのです」「子ども達に必要な環境とはこういうことだと考えています」など自園に誇りをもって語れるようになれば、大いに改築や改修が意味あるものになると考えています。

2018年度は「**子どもが遊び込める**」園庭の改修を行いたいと考えています。さて、どうなることでしょうか?楽しみにしたいと思います。

みどり野保育園 園長 中田一夫

甲子園二葉幼稚園 増築園舎(新館)が完成しました

地域の子育て支援の拠点となるためにという思いから、この園舎増築は計画されました。運営のコンセプトは、「幼稚園併設型『子どもの居場所』」でした。

さて、甲子園二葉幼稚園のモットーは、「子どもも大人もいきいき笑顔の幼稚園」です。子どもたちの幸せな笑顔の実現のためには、大人も幸せであり、笑顔でいることができること。そのためにわたしたちにできることは何かと考えた時、まずは安心して過ごすことができる環境を用意することでした。

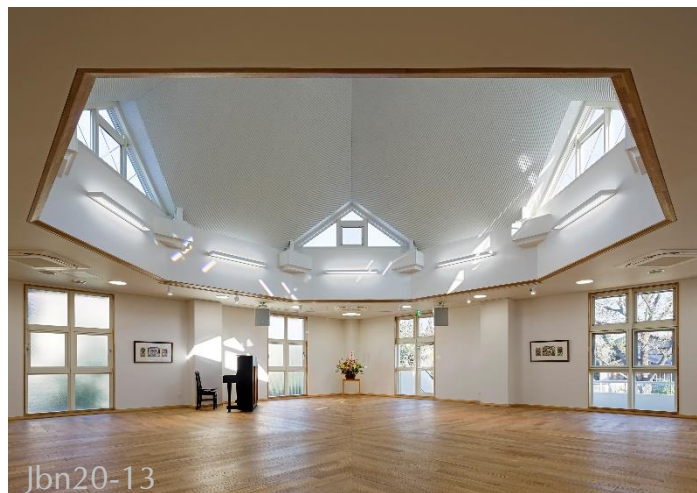
「子どもと大人の居場所となる」と、強く決意しました。

もちろんそれは、ハード面ばかりではなく、中身こそ大事。わたしたち保育者がどのような思いを持って、どのような保育を行うのか。そして、目の前にいる子どもたちや、その保護者にどのように寄り添うのか。考えに考えて出した結果でした。それは、今に始まったことではなく思い起こせば2001年に土地を購入した折に、今井鎮雄元理事長が「この土地に地域に喜ばれる建物を建てなさい」と言われたという話を伺った時からの決意でした。



園長になり、神さまは「わたしにせよ」と仰せられたのでしょうか。その話が現実にも目の前に浮上しました。しかし、その時には資金も十分ではなく、時期尚早とのことで見送ることとしました。が、子どもを取り巻く状況の変化を見ていますと、居てもたっても居られない気持ちになりました。「今やらなければ」ただそのような思いだったと思います。

2015年度より、新制度がスタートし、国も子育て支援を前面に打ち出してきました。子どもたちの幸せな笑顔のために、地域のセンター的役割を担っていくこと。そのために園舎増築工事を実行する。こうして10年ほどかかって、ようやく夢は実現しました。



今新館が建って、子どもたちはもちろんのこと、保護者も子育てひろばに通って来られる親子も、近隣の方々も、そして教職員皆が笑顔になりました。その幸せそうな笑顔がますます輝きますように。甲子園二葉幼稚園、「チーム二葉」のわたしたちスタッフは一心を合わせてこれからも「地域に喜ばれる園」として歩んで参りたいと思います。皆さま是非一度のぞいてみてください。



甲子園二葉幼稚園

園長田村三佳子&教職員一同

幼保連携型認定こども園 友愛幼児園スタート

2017年4月から、のぞみ保育園に続いて友愛幼児園も幼保連携型認定こども園になりました。2015年から新制度における移行の経過措置期間(5年)が始まり、3年目に移行する形になりました。いろいろと悩み、考え、話し合った2年間でした。

神戸市私立保育園連盟においては、2017年4月現在で166カ園中、ほぼ100カ園がこども園になりました。



それぞれの行政により、移行を積極的に推進するところ、民間にお任せのところ、消極的なところとまちまちです。国が推進していることに対して地方行政がこれだけ姿勢が違うのも、ちょっとおかしいと思うのですが、実態はそういうことです。イエス団は京都、大阪、奈良、和歌山、兵庫、徳島、香川と各々の行政のカラーもあり、法人一斉に“右向け右”とはいきません。そこがイエス団のいいところでもあります。ある意味、施設長の判断が重要であるということでもあります。大きな責任が伴う判断だと思っています。

友愛幼児園が、こども園に移行した理由は以下の通りです。

1. 受け入れ対象を“すべての子ども”とすることができること。
このことで、保育が必要な子どもという市場が、全ての子どもという市場に拡大します。ということは、保育を必要とする子どもの数が減少し、保育園に空が出てくる状況になった時も、1号認定こどもを対象としていけます。また、保育が必要と認定されなくても、園の判断で入園させることが可能になります（例えば、地域の要保護児童、生活困窮の家庭の子ども）。
2. 今回の教育要領、教育・保育要領、保育所保育指針の改定で、教育の部分が共通になりましたが、その“教育”をさらに深め、小学校と“幼児教育施設”として強い連携を取っていけると考えました。職員も保育士と幼稚園教諭の資格が必要となり、改めてこども園における“教育”を考えていく機会になると思いました。
3. こども園については国が推進しているところであり、幼保連携型認定こども園は、国、地方公共団体、学校法人、社会福祉法人しか参入できない事業です。イコールフットINGが言われている現状の中では、その他の法人が参入できないという点も大きなことだと考えます。

大きくはこの3点ですが、これまで保育園（児童福祉施設）としてやってきた行政とのタッグをしっかりと継続し（要保護児童の情報共有や見守り等）、さらに幼児教育施設として教育・保育の内容を深めていくことが大切です。

地域の子育て支援も義務づけられました。友愛幼児園が、この地域で1935年から保育を行い、大事にしてきた精神、民間の主体性をさらに発揮していける施設として地域にあり続けたいと思います。

幼保連携型認定こども園
友愛幼児園 園長 馬場一郎

沖縄平和研修

～研修を終えて～

2017年6月22日から5日間、各施設から送り出していただいた9名が、沖縄平和研修に参加させて頂きました。私たちは第13回の研修生となります。今までこの研修に多くの方が参加されてきたことと思いますが、イエス団報に改めて報告をさせていただきます。

今年度の研修は、まず『不屈館』の見学からスタートしました。“沖縄での多くの問題”に対して、私たちの知識や意識は、それぞれに温度差がありました。ですから、不屈館からスタートできたことは、これから始まる研修への良い意味での緊張感を持つことが出来たと思います。

そして何よりも「私たちは沖縄の歴史を知らない、沖縄では戦後は終わっていない」ことを気づかされました。多くの命が無駄に消え、多くの沖縄の人々が財産・権利を奪われ、闘い続けている歴史・現実が70数年にわたり続いていて、今、基地問題が沸き起こったのではないのです。沖縄の人には当たり前のことを、私たちは知りました。



その後に出かけた嘉数高台は、沖縄戦で最大の激戦地となったところであり、日米の軍人のみならず、多くの住民の命が奪われたところであり、戦争の傷跡が今も色濃く残っていました。

また、2004年に沖縄国際大学に墜落した米軍ヘリコプターが残した傷跡も目の当たりにしました。沖縄を訪れたその日、上空を爆音と共に飛び交う米軍機を眺め、沖縄の平和は遠いところにあるのだと知らされました。

そして2日目に、平和行進に参加しました。15キロの道のりを、5時間をかけて行進しました。途中の3か所の休憩ポイントで、死者のための祈り・平和の歌を賛美しながら歩き続けました。今は舗装された歩きやすい道ですが、ひめゆり学徒隊の少女たちは日本兵と共に銃弾が飛び交う中を懸命に歩いたのでしょうか。そして多くの少女たちが命を落としました。たくさんの魂がこの地に眠っているのです。



3日目、私たちは辺野古新基地建設阻止行動を行っている船に乗せてもらいました。船での体験は私たちの想像を超えていました。黒いウェットスーツの海上保安庁の隊員に拡声器で威嚇され、ビデオで撮影され、その中で『基地建設反対』と声をあげるのには大変な勇気がいりました。船の上で聞いた船長の話(隊員の中にもいろいろな思いを持った人もいる)がなければ、ただただ怖い、悲しい、苦しい体験になってしまったことでしょう。その夜、私たちは夜遅くまで話し合いました。それぞれの思いを吐き出しました。それぞれが、沖縄の平和を心に刻みま



4日目、伊江島にわかりました。伊江島は、日本軍の飛行場があったために、当時大変な戦場となっていました。戦後は、米軍に土地を強奪されたため、村民による運動がおこります。そして、今も全面積の35%が米軍用地で占められていて、島のいたるところに基地を受け入れることによる恩恵を受けた立派な施設がたくさんありました。基地を受け入れることで交付されるお金を受けなければ、村の予算が成り立たない状況になっているのです。

ひとりひとり年齢もおかれた環境も、また沖縄の状況についての認識も違いました。けれど5日間の間、懸命に思い、悩み、苦しみ、考えま



ここに、9名のメンバーの事前事後アンケートをご紹介します。

【研修前】

今、沖縄に抱えている印象や思い

- ・海がきれいで人や町も穏やかな印象
- ・時間がゆっくり流れ、のんびりしている、沖縄タイム
- ・自然がいっぱい残っているのどかな島 ・リゾート、観光地
- ・人や自然環境(青い海、空、星空等)、文化(ごはん・音楽・言葉等)が魅力的
- ・事前研修ビデオを元に、現地の人の思いを知っていきたい
- ・沖縄戦で尊い沢山の命が奪われた、ぬちどう宝
- ・米軍基地、基地建設反対運動
- ・基地問題も仕方がないものだと感じていた、基地があるから守られている

今、あなたの思う・考える平和とは何か

- ・戦争のない国、社会
- ・子どもたちの笑顔を守る事
- ・みんな笑っている
- ・一人ひとりが自分らしく生きられる、笑顔で過ごせる、戦争や差別のない社会
- ・基地は必要だと思っていた。理由は基地があるからこそ、日本は守られているのではないかと安易な思い
- ・人それぞれがお互いの違いを認め、受け入れる(許容し合う)事で作れるもの



【研修後】

今、沖縄に抱いている印象や思い

- ・最初に抱いていた沖縄の印象とはかけ離れた世界だった。戦争の時代から今の生活の中での恐ろしさ、そしてこれからの不安など全てにおいて穏やかに過ごしていられない現状
- ・戦争は今もまだ続いている、終わっていない
- ・基地は沖縄の問題だと思っていたが、これは一人ひとりに関わる事であり、みんなで考え、動かなければならないことだと感じた
- ・今の沖縄は、安心して生活できるとは思わない。報道もあまりされず、私たちが知らない恐ろしい事件がたくさん起きていることに驚き、これを知らない国民がたくさんいることに悲しくなった。
- ・私たちの知らない過去と向き合い、日本全体の未来の為に自分に出ることを真剣に考え行動されている姿を目の当たりにし「オール沖縄」を感じた
- ・事前の自然豊かなイメージはそのままだったが、その裏には沖縄に住む人たちの恐怖や苦悩があることを知り、無知だった自分が怖くなった
- ・沖縄の現状や政治に少しでも多くの関心を持ち、身近な人からでも周知できるように行動していきたい
- ・当たり前なんてないと感じるくらい、今もなお、ありえないことが起こり続けている現実がある島
- ・平和を祈り、平和とは何か考え続け、平和を訴え続けなければならない島
- ・今も戦っている人がいる
- ・様々な出逢いのなかで、何度も行きたくなる、心動かされる島

今、あなたの思う・考える平和とは何か

- ・戦争だけではなく今の生活を平和に過ごす為に自分たちが動き、作り出すこと
- ・笑顔＋普通の生活＝平和
- ・みんなが笑顔でいられること、安心して過ごせる事
- ・みんなが笑顔になる事から始まる
- ・一人ひとりが、平和について考え、思いながら生活することで平和は作られるのではないかと感じた
- ・笑顔を作り出す為に常に創造し続けること
- ・日々の生活が恐怖にさらされる事なくみんなが『笑顔』で過ごせる社会
- ・戦争は終わった事と、他人事のように思っていた自分を恥ずかしく思う。沖縄の人たちの「戦争は終わってない」という気持ちが心にすごく響き、「平和」という言葉の重みを改めて感じた。起こったことを知り、心に置き、生活をし、その中で考えることが大切。家族、周りの人等すべてのひととの関わりの中で「生きる」と感じ生活することが「平和」なのかと、今、思う。
- ・一人ひとりがありのままに自分らしく生きられること。平和は一人ひとりが創り出すもの
- ・みんなが戦うことなく笑顔で過ごす



この研修で、沖縄のたくさんの方に出会いました。たくさんの方がわたし達に語りかけてくれました。そして、たくさんの方が今もなお苦しい戦いの中にありながら、本土から訪れた私たちに笑顔を見せてくれました。たくさんの方と、友情の握手を交わしました。

わたし達は、この研修に参加させて頂き、これからの平和に対する自分自身の課題と向き合い、平和をつくり出すJBFフェローズとして、違いを認め合い、赦しあい、愛し合う人として、歩んでいきたいと願っています。

ぶどうの木保育園 山田菜央
愛隣デイサービス 森本大己
桃綾保育園 金谷麻由
桃綾保育園 佐藤由佳
神視保育園 谷口浩美

空の鳥幼稚園 西田知美
宇山光の子保育園 森田陽也
一麦保育園 岩崎栄美
聖浄保育園 峰浩美

J. B. フェローズ活動報告

四国ブロック

2017年度の四国J. B. フェローズは

- ① 四国ブロック研修
- ② 豊島草刈りボランティア
- ③ 長島愛生園ハンセン病研修の参加
- ④ 豊島の2施設合同夏祭り企画依頼・参加
- ⑤ 光の子施設訪問、熊本復興支援報告会
- ⑥ 各施設の子どもたちの作品の送り合いの活動をJ. B. 担当ではない職員も参加することで交流を深めようと活動してきました。

① 四国ブロック研修

四国ブロック職員が参加しました。みんなでミッションステートメントの再確認、イエス団が目指している方向性を確認することができました。また、普段なかなか話す機会のない四国ブロックの方々と話す機会を与えられて、有意義な研修でした。

② 豊島草刈りボランティア

mammaカフェのスタッフの方々と交流ができました。以前との草刈りの場所が変わりましたが、今年もみんなと協力して草刈りをしました。また、mammaカフェの方と相談して豊島の豊かな自然の中でシーカヤック、流しそうめん等を体験し、楽しむことができました。

③ 長島愛生園ハンセン病研修の参加

研修に参加する前は、ハンセン病について詳しく知らなかったのですが、治る病気であるということを学びました。また、みんなに正しく病気のことを伝えていかなければいけないと思いました。これからもハンセン病について積極的に学びたいと思います。

④ 豊島の2施設合同夏祭り企画依頼・参加

2施設になり役割分担が大変になってきており、豊島夏祭りを何のために行うかを考えていきたいとの声が上がりました。様々な課題はありますが、今後に向けてみんなで検討していきたいです。



⑤ 光の子施設訪問、熊本復興支援報告会

施設見学を通して、靴を履いて保育することにより転倒防止や、避難時に怪我しないようにしている等の新たな発見がありました。

田中仰先生の熊本復興支援の話聞き、改めて地震の怖さを知り、今私たちに何ができるかを考える良い機会になりました。



報道では支援物資が足りていないと報道されていましたが、実際は支援物資を処理しきれていない現状があり、温かい炊き出しはみんなが食べる事が出来ず不公平さがうまれてしまうという衝撃的な内容でした。ボランティアとして保育士が子ども達のお世話をすることがすごく助かったと言っていた、自分たちの仕事に誇りを感じることができました。



⑥ 各施設の子どもたちの作品の贈りあい

昨年度に引き続いて子どもたちの作品を豊島夏まつり・敬老の日、クリスマスの贈りあいをしました。各施設で受け取った作品を飾り、その写真を送り合うことで、子どもたちも自分たちが作った作品が飾られている様子を見て、とても喜んでいました。来年度もぜひ行いたいと思います。

報告：四国ブロックリーダー
神愛館
藤岡沙央里・藤岡明日香

兵庫ブロック

今年度のJ. B. 兵庫ブロックの活動は例年の活動に加えて、京都ブロックから始まった「給食室研修」を初めて行う事ができました。

9月25日、のぞみ保育園で各施設の栄養士、調理職員が集まり、午前には実際に現場で調理などの作業を行い、園児の食事風景も見学し、良い時間になったようです。午後には事前に各園から集めたアンケートを元に

- ・ 食育について（園でどのような事をしているか）
- ・ アレルギー対応はどうしているか
- ・ 離乳食はどうしているか（何段階くらいに分けて、どのくらいの大きさにしているか）

- ・ 給食やおやつの人気メニュー、おすすめレシピについて意見交換会を行いました。



たくさん深い話ができ、人気メニューを紹介する時間には各施設ここが自慢！！といった内容もありました。参加させてもらった保育士の私も普段なかなか聞けない話を聞け、いつも熱心に愛情たっぷり子ども達の健康と成長を支えて頂いている事を改めて感じ、感謝した瞬間でした。

最後にみどり野保育園・中田園長から

- ・ 給食室の孤立化
- ・ イエス団の食育とは

といった内容についてもお話があり、考えさせられる時間であると同時にこのような良い研修が今後も続いていき、各ブロックを超えて輪が広がり、イエス団としての食育を考える研修ができる日が来る事を願うばかりです。



また兵庫ブロック交流会は9月9日に第6回目を無事行う事ができました。今年の研修は「こども讃美歌研修」を尼崎教会の山本有紀牧師を講師に迎えて行いました。普段歌っている讃美歌から、初めて歌う讃美歌もあり、また内容も細かく教えて頂き、とても勉強になりました。その後は恒例の交流の時間。ゲームの時間も大盛り上がりで、最後まで楽しそうな声が各テーブルから聞こえ、今年もつながりを感じられた交流会となりました。

報告：兵庫ブロックリーダー
一麦保育園 武田由美

京都ブロック

2017年度のJ. B. フェローズ京都ブロックの活動は、

- ① 「発達障がいに関する意見交換会」
- ② 「給食に関する意見交換会」
- ③ 「J. B. F. 京都交流会（J. B. F. 京都大作戦2017）」
- ④ 「豊島研修」「長島愛生園研修」

主に4つの活動を行ってきました。

① 「発達障がいに関する意見交換会」

今年度は年3回集まり3施設の事例報告と講師をお呼びして講演会をして頂きました。具体的な事例を持ち寄り、意見交換をすることで利用者、保護者とのより良い日々の関わりとは何かと考える良い機会になっていると思います。

② 「給食に関する意見交換会」

年2回各施設の調理職員が集まり献立作り・レシピ・提供する器・スチコンの使い方等の調理職員ならではの情報交換や意見交換の貴重な交流の場になっていると思います。

③ 「J B F 京都交流会（J B F 京都大作戦2017）」

今年度も1月に桃陵保育園ホールをお借りして行う予定です。ここ数年「交流」をテーマに行ってきました。今年度はその中でJ. B. フェローズがどんな活動をしているのか？しっかり伝えていきたいと思っています。そして、普段交流の少ない他施設の職員がより良い意見交換をして横の繋がりを作りながら共有し合える時間にしていきたいと思っています。

④ 「豊島研修」「長島愛生園研修」

「豊島研修」は今回、台風が近づいているということもあり中止にしましたが、安全に配慮しながら日帰りでも可能な方に参加して頂き、行いました。今年完成した豊島神愛館をリノベーションしたmamm aを拠点に研修を行いました。

「みんなに伝えたい豊島」をテーマにして2年目になります。今年度研修するにあたり、神愛館職員の方から事前に豊島神愛館の歴史を踏まえたアドバイスをいただきました。

神愛館は坂出に移転してから豊島神愛館の歴史をしらない職員が多くなってきた。これまで神愛館で亡くなった子どもたちの墓前礼拝をしてきた事を忘れず伝えていって欲しいということでした。



この貴重なアドバイスを大切に研修にとりいれました。今後も賀川豊彦の活動・産廃問題・神愛館の今後・島の行事に参加交流等、研修を通して感じて頂き、「みんなに伝えたい豊島」の『みんな』のところを各施設の『子ども』『利用者』に代えて思いを伝えて頂きたい！！

そして、このたくさんの貴重な学びを1度きりの研修で終わるのではなく島の方々との交流をしながら継続していきたいと考えています。

継続の思いを込めてみんなで植えたレモンの木も島の方々の力、イエス団職員の力で少しずつですが大きくなってきています。今後もみんなで成長を見守って頂けたら幸いです。随時レモンの成長、草花、収穫の様子や豊島での交流も報告していきたいと思います。

「長島愛生園研修」では、資料館の見学、当事者の方の体験談、懇親会を通じて「ハンセン病問題」「自分の中にある差別」等、理解出来る貴重な機会となりました。翌日は、長島愛生園内の清掃をお手伝いさせて頂きました。これからも継続して研修等を行っていき各施設に持ち帰れる様に考えています。

2017年度は、この4つの主な活動を継続的に繋がりながら行って来ました。そしてその中から新たな発想や展開が生まれ今まで繋がってきた方々や新たな出会いの中で繋がった方々の協力を得て支えられながら動き出しました。

今年は「伝える」を目標に進めて行こうと思って活動をしてきましたが「伝える」ということは、「続ける」ということではないかと感じました。

今までのJ. B. フェローズの活動があり今がある。その事を思いながら、これからも今までの繋がりを大切にしながらこれからも、J. B. フェローズは一人ひとりの大切な「聲」に耳を傾け、輝きみんなと繋がりが持てる様に実践していきます。

報告：京都ブロックリーダー

宇山光の子保育園 荒木 健

大阪ブロック

2017年度の活動は以下の4点を中心に進めました。

① 施設訪問を行うことで理解を深め、お互いの学びとする。

② 職員通信を発行してつながりを深める。

③ 震災復興支援について

昨年度までタオル販売を行っていましたが、東北の業者がタオル販売を行わなくなったことで今年度はどうしていくか検討中。

④ 給食室の交流会を昨年に引き続き行う。

J. B. 担当ではない職員も参加できる者は参加する事で交流を深め、J. B. の取り組みを周知するようにしました。

① 施設訪問

●「6月19日（月）馬見労務保育園公開保育・施設見学」

夏の遊び（プール遊びやボディペインティング、どろんこ遊び）を中心に公開保育を見学させていただき、子ども達と一緒に触れ合いの時間を持ち理解を深めました。また昼からは意見交換を行い、各施設の話や聞き事それぞれの学びや刺激となり、悩みなどの共有も出来ました。

●「豊島合同夏まつり・長島愛生園研修」

四国、京都、兵庫ブロックと共に協力し参加させて頂きました。

●「10月2日（火）ガーデン天使施設見学」

入居されている方がどのような生活をされているか施設見学をさせていただき、お年寄りの方と夏祭りを通して触れ合いの時間を持ち理解を深めました。また、職員の方と意見交換会を行い、施設・保育園に共通する悩みなど共有し、良い学びの場となりました。



② 大阪職員通信

●第14号発行（9月末発行）

内容：・馬見労務保育園施設見学報告

・ハンセン病研修報告

・各施設取り組み紹介

・キリスト教Q&A

●第15号発行予定（2月中旬発行予定）

内容：・ガーデン天使施設見学報告

・豊島研修報告

・給食室交流会報告

・各施設取り組み紹介

・キリスト教Q&A

③ 震災復興支援タオルについて

●昨年度業者が生産を取り止めてしまった為、今年度はこれからのような方向性で復興支援を行っていくか考える年とさせて頂きました。意見としては、震災を忘れず伝えていきたいという思いから、現地の保育園とつながりを持っていきたいという事と、販売するものをタオルから変更し収益を支援としたいという意見などが出ており検討中です。

④ 給食室の交流

●11月13日（月） 聖浄保育園にて行う

・焼き芋パーティー（幼児クラスと共に参加）

・乳児、幼児クラス給食見学

・職員同士で意見交換を行う



◎ 大阪ブロック会議

1回目 5/11 2回目 6/19 3回目 2/9予定

報告：大阪ブロックリーダー
天使保育園 上月尚子

イエス団の輪っ

「イエス団の輪っ」と題してリレー形式での投稿です。理事・評議員から一人、一般職員は、各ブロックより一人ずつ寄稿して頂きます。

7 回目は、理事の呉光現さんから、理事の田村三佳子さん。四国ブロック：飯原有紀子さん(瞳保育所)から倭 実咲さん(光の子保育園)、大阪ブロック：瀧尻充代さん(馬見労務保育園)から北川理恵さん(愛之園保育園)、兵庫ブロック：栗浦康恵さん(みどり野保育園)から根口京子さん(杉の子保育園)、京都ブロック：森田陽也さん(宇山光の子保育園)から杉本基晴さん(ゆうりん)です。



学校法人イエス団理事
甲子園二葉幼稚園 園長
田村三佳子さん

「平和を共に」

呉光現さんから、バトンを渡された学校法人イエス団甲子園二葉幼稚園園長の田村三佳子です。わたしは入職からこれまで42年間、イエス団で働いて参りましたが、どっぷりと関わるようになったのは、園長になってからの10年間です。

企画委員としての1年目は、亡くなられた賀川督明さんと共に、イエス団のロゴマークなど、「どのように法人の理念を職員に浸透させるか」を考える部門にありました。2年目からは、「幼稚園なので、わたしには長期休業日等がありますから、是非研修のお手伝いをさせてください」と申し出て以来、ずっとイエス団の研修に関わらせていただいています。また、理念委員として、MS2009の策定にも関わりました。「今、わたしたちはイエスに倣って生きる」というまさにこの言葉です。

光現さんとは、研修委員として出会わせていただきました。また光現さんのお蔭で、今年も生野で3回目となったリーダーシップ養成研修Ⅰを行うことができました。歴史を学び、生野の現状を知り、たくさんの傷ついた方々と出会い、わたしたちはどれほどの衝撃を受けたことでしょう。

京都の東九条でも、リーダーシップ養成研修Ⅰ・Ⅱと施設長研修が行われました。わたしは、その全てに参加しました。「いのちが大切にされる社会」「隣人と共に生きる社会」「違いを認め合える社会」「自然が大切にされる社会」そして、「平和をつくりだす」。

そうですわたしたちは、目の前にいる大切な人たちに幸せになってもらいたいのです。

「では、自分に何ができるのか。」

「わたしたちは保育士なのに、なぜ生野に？なぜ東九条に？」そんな声も聞きました。

しかし、差別の現実を知ることにより、大事にされるべき人々のことを思いました。皆同じなのに、なぜ？その思いは拭えません。その現状を知ることにより、わたしたちにできることが見えてきました。

今わたしは、幼稚園の子どもたちと保護者、そして職員と向き合っています。その一人ひとりを大事にするところからこのミッションを実現しようと思っています。

すぐ傍にいても、関わりをもたなければ隣人とは言えません。しかし、関わりのある人だけでいいのかとも思います。視点を変えれば、関わりをもつことができる方々がたくさん傍にいます。幼稚園にだけいたのでは得ることのできない新たな仲間との出会い。

なぜ、生野なのか。なぜ、東九条なのか。

そこには、かけがえのない、わたしたちの仲間がいるのです。すぐ目の前にいる利用者さんだけでなく、わたしたちのことを必要としてくださっている仲間がいるのです。

さて、共に生きるとはどういうことなのでしょう。聖書では、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」(ルカ10章27節)とあります。隣人と共に生きる。そんな私たちイエス団の仲間でありたいと思います。一人ひとりがそのことを大事にすることから、平和をつくりだすことに繋がるのではないのでしょうか。

一人ひとりが大事にされ、どの人も安心して過ごせる社会—平和な世界をつくることができますようにと今、切に祈ります。

次は、神戸イエス団教会牧師の上内鏡子理事にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。



四国ブロック
光の子保育園 倭実咲さん

「私が見えてきたもの」

光の子保育園、そしてイエス団の一員となり今年で18年目となりました。

18年…本当に、あっ！と言う間でした。出会いや別れがあり、嫌なこと嬉しかったこと、全てを共に歩んだ光の子保育園には思い出がたくさんありました。その中で色々な経験を経て自分の中で引き出しが増えましたし、スキルアップも出来たのではと思っています。

今私は乳児クラスで一日を過ごしています。

乳児は一日一日の成長がとても大きく入園当初は、みんなが慣れない環境で大泣きの姿がありました。次第に成長をして「あれ？こんな出来てる！」「歩けた！」「アンパンマンって言うたよな！」など、泣き声も少なくなりその代わり出来る事が増えて、その都度成長を共に楽しみながら生活をしています。またお家の方との交流も大切に、家で色々な様子や悩み事そして子どもに対しての質問などお互いに連携し理解し合う事を大切に考えています。

生活をする中で MS2009 の『わたしたちは隣り人と共に生きる社会をつくりだす』今の状況によく合っているなあと感じる事があります。

子どもは私たちを必要としており、そんな子ども達に手を差し伸べる。子ども達は小さな手で私たちにしっかりとしがみついてくる。そしてそれがお互いにとって良い刺激または癒しになっていく、なんて素敵な関係だと思いました。

どんな時も自分とは違う考えを持った隣り人(同僚、保護者、子どもなど)を身近に感じ理解しながら、それぞれにお互いが大切な存在である事を忘れないようにする。その気持ちが一番大事なのではないと思っています。

最後に、自慢ではありませんが…私にとって光の子保育園はとても居心地が良く園長先生も私たちの事をよく理解してくれています。新しいことにチャレンジする事に賛成してくれ、相談にもよくのって下さり感謝しています。これからも光の子保育園のメンバーと共に同じ目標に向かって歩んで行きたいと思っています。

次は豊島ナオミ荘さんをお願いします。





大阪ブロック
愛之園保育園 北川理恵さん

「キリスト教、イエス団とのつながり」

このたび馬見労働保育園からバトンを受け取りました、愛之園保育園の北川理恵です。今年で18年目を迎えました。

わたしとキリスト教の出会いは、愛之園保育園に就職してからです。働き始めると、保育の中でお祈りをしたり、讃美歌を歌ったりしている姿を目にし、それまで経験がなかったので戸惑い、自分にもできるのか…と、不安になった事を覚えています。

日々、讃美歌を歌ったり、お祈りで「目に見えないけれど、神さまが一人ひとりを大切に思っていて、いつもそばに居て見守ってくださっていること」を伝えていきます。

子ども達の前で祈り、それを日々繰り返すことで、今担当している0.1歳児の子ども達も讃美歌に親しみ、曲に合わせて気持ちよさそうに体を揺らしたり、口ずさんだりし、保育者を真似て手を合わせ「アーメン」をしています。始めは目に見えない神さまの愛を、子ども達に知らせるのを難しく感じていましたが、わたしが願いや感謝を神さまにお祈りするとき、子ども達はその姿を通して神さまを感じているように思います。

愛之園保育園は“すくすく育つ豊かな心、強いからだ”“いつも神と人に愛されている事を覚え、心も身体も健やかに成長し、知恵に満ちた子どもに育つ”を保育目標としています。「神様が一人ひとりをかけがえのない者として愛し守ってくださること」を伝え、自分を愛し、周りの人も愛し、共に愛し合って生きることができるよう、一人ひとりの違いを認め、思いやる心をもてるような環境づくりを大切に保育をしています。

子ども達の心身の健やかな育ちの為に、保育者や保護者だけでなく、地域の方々とも連携し、良い環境をつくりだしていく必要性を感じています。

今後の課題でもありますが、高台移転に向けて今まで以上に地域に根付き、つながりを深め、子ども達の成長と一緒に見守っていける関係作りができるよう、努力していきたいと思っています。

乳幼児期は人間の生涯の基礎が形成される時期と言われていますが、この大切な時期に子どもの成長に関わる保育者として、使命の重さを思わずにはいられません。子ども達の成長を側で感じられることに感謝し、一人ひとりを大切に愛を注ぎ、成長を育てていきたいと思っています。

イエス団につながっているという意識が薄い私でしたが、大集会に参加し、イエス団という大きな団体の一員であることをとても感じました。他の施設とは遠く離れているので、交流する機会は少ないですが、大集会の後、公開保育やブラッシュアップ研修、フォローアップ研修に参加し、ミッションステートメント2009に基づき保育している仲間、様々な話を聞く事が出来、学ぶことが多かったです。

同じ考え方であったり、同じ悩みを抱えていたりし、共感できる部分が多いですが、自分に足りない部分に気づかされたりと、人として、保育者としての自分を見つめ直す良い機会にもなっています。職場の先生たちだけではなく、遠く離れていても思っている事や悩んでいることを相談できる仲間がいる事に感謝し、これからもつながりを大切にしていきたいと思っています。イエス団の一員として、愛之園保育園の一員として、今私にできることは何か、やるべきことは何か、よく考えながら、これからもたくさんの方の事を学び成長していけるように頑張っていきたいと思っています。

次号は天使虹の園さんをお願いしたいと思っています。よろしくお願いします。



兵庫ブロック
杉の子保育園 根口京子さん

「出会い」

杉の子保育園は、神戸市立医療センター中央市民病院の院内保育園です。2011年7月に病院移転に伴い、現場所に引っ越して来ました。

私とイエス団の出会いは、今から25年前になります。私が杉の子保育園（前園舎）を知ったのは、その当時中央市民病院に父が入院しており、その病室から園舎の屋根が見えていて、子どもたちの姿を目にすることがありました。

キリスト教の園ということも知らず、ましてやイエス団について全く知らない私が、何かに引き寄せられるかのように、急遽採用試験を受けることになりました。杉の子保育園についての情報を調べるにも、今のようにホームページもなく、分かっている情報といえば、院内保育園と公立の園ではないということだけでした。そんな状況の中、面接を受け今に至っています。

杉の子保育園に勤めるようになり、父が入院中お世話になった看護師さんと保護者として再会したことも含め、何か不思議な縁を感じました。

勤め始めた頃は、法人の一員としての意識は薄く、日々の保育に一生懸命でした。それから十数年経ち、2009年賀川豊彦献身100年記念式典の実行委員としてお手伝いさせていただいたこと、その後のJBフェローズとしての活動、リーダーシップ研修や兵庫ブロック主任会などで、キリスト教保育や賀川先生のこと、ミッションステートメントについて学んでいくうちに、少しずつ理解できるようになりました。グループワークなどを通し、他園の方々と意見交換したり、悩みなどを話し合ったりする中、共感していくうちに、仲間意識が芽生えるようになったと思います。他園の方々と輪が広がっていく中で、今まで以上にイエス団の一員としての自覚が持てるようになりました。

クリスチャンではない私が教会に行ったり、子どもたちに聖書のお話をするに悩んでいた時、今は亡き賀川督明さんとお話させていただく機会があり、アドバイスをいただき気持ちが楽になったことがありました。今思うと、本当に貴重なひとときでした。

子どもたち、保護者の方々、職員、イエス団に繋がる人達に、いろんな時期に、いろんな場所で出会えたこと、これから出会う人達も、私にとって意味のあることだと思っています。そして、日々の保育の中で、子どもたちひとりひとりを大切に関わっていききたいと思っています。

これからも、イエス団に繋がる方々との出会いを大切に過ごしていきたいと思っています。

次号は、神視保育園の方、よろしくお願い致します。





京都ブロック
障がい児・者ホームヘルプ事業
「ゆうりん」 杉本基晴さん

「学び続けられる職場」

宇山光の子保育園の森田先生から直々に指名をいただき、自分とイエス団とのつながりを考える機会になり光栄に思います。

私は、障がい児・者ホームヘルプ事業「ゆうりん」の杉本基晴と申します。私が大学生の時にヘルパー2級の資格を取得し、その後、ゼミの担当になったのが平田さんでした。その時から平田所長の事業所で、ヘルパー登録をして8年がたち、今は「ゆうりん」の職員として働いています。

キリスト教とは関わりがない環境で育った私ですが、イエス団の理念や活動を知っていく中で、この法人では、福祉現場の仕事以外にも外部研修など学べる機会が多く設けられていることを知り、勉強嫌いなはずなのに気がつけばこの職場を選んでいました。

学習会やフィールドワークなど、どれも学校では、学べないような情報ばかりで貴重な機会を与えられていると感じています。特に、沖縄平和研修では、戦争の事や日本の歴史にふれ、戦争が終わってから奪われた土地の返還を求め、米軍基地の建設をゲート前で阻止行動を行っている事を目の当たりにしました。新聞や NEWS では、あまり報道されない事実もあります。沖縄だけの問題でなく、日本全体で考えていく必要があると感じます。きちんと書かれている新聞や阻止行動している方の投稿を僕も SNS で拡散して関心を持ってもらえる人が増えていけばと思っています。

また、豊島にある同法人の高齢者施設「豊島ナオミ荘」に人員不足を補う為、手伝いに行く機会があり、別の施設で働く機会を与えられました。少人数の職員だからこそ、1人にあたる介護の負担は、大きくなることもありますが、皆で協力し合うことの大切さを学び、そこにおられる高齢者の方のたくさんの笑顔に出会い、高齢者への苦学意識が少し和らぎました。最近では、豊島に行く機会がないので、また何かの機会で豊島へ遊びに行きたいと思っています。

また熊本の震災支援にも行く機会が与えられました。私が行ったのは、震災からすでに半年経ってからでしたが、整備されていない道や、全壊しているが撤去待ちの住宅などがあり、地震も続く中で、改めて震災の恐ろしさを目の当たりにし、どこでも誰にでも「いつか」おこる事ではなく、「常に」備えておくことに考えが変わりました。

私が現在働いている「ゆうりん」では、老若男女問わず、障害のある方の生活全般をサポートしています。

出会った頃は、目線を合わせる為に、しゃがんで話していた子が、今は私が見上げる様に成長した利用者の方もおられます。出会った頃のことを走馬灯のように思い返ししながら、保護者の方と話す事もあります。ある日保護者の方から「知り合った時は大学生で、杉本君だったのに、今では、杉本さんだね。」と言われました。保護者の方も私が長く勤める中で成長している姿を見てくれており、自分も利用者の方も一緒に、共に成長していくことのできる職場なのだと実感しました。

これからも、全ての人が、その人らしい生活が送れるように努めていきたいです。

次に京都ブロックで、イエス団の輪のバトンを受け取ってもらおうのは、空の鳥幼児園の先生で、よろしくお願いします。

表紙写真の解説



写真上から①～⑨の順

- ① 0歳児クラスの初めてのお散歩。避難車に乗って消防署に行きました。
天隣乳児保育園
- ② これはみんなで「だるまさんころんだ」をしています。ファミリーホームは行事計画書のようなものがないので、このように「天気がいいから」「ちょっとどっか行こうか」と家庭に近い形で外出に行く事ができます。子どもたちとも、そこにでかけるか話し合ってみてみんなで出かけます。
ファミリーホーム ハンナ
- ③ 楽しく泥遊び。暑かった夏だったけど思いきり泥まみれで遊びました。
天隣乳児保育園
- ④ てんぐうちわ おばばんち
今年の夏休みに、みんなで養育者の母(子どもたちからはおばばと呼ばれています)の実家へ2泊3日で行ったときのものです。
ファミリーホーム ハンナ
- ⑤ どちらも愛しい命
一麦保育園
- ⑥ てんりん感謝会
天隣乳児保育園が閉園となり神視保育園と統合されたので感謝会を行いました。
天隣乳児保育園
- ⑦ 近くの公園で
甲子園二葉幼稚園
- ⑧ 大きな竹の子見つけたよ
瞳保育所
- ⑨ 楽しい楽しい3歳児時代
杉の子保育園

編集後記

日本よりも世界的として有名で、ノーベル平和賞候補にもなった賀川豊彦は、多くの苦難を乗り越え、神戸のスラム街に住み込み、そこに住む人々に寄り添いながらセツルメント運動、社会運動を展開しました。弱者とともに歩み、戦争に反対し、世界平和のために身を捧げた賀川豊彦は、キリストに倣い、「愛は私の一切である。」という名言を残しています。

私たちイエス団は、その誕生からこれからも、イエスに倣って生きた賀川豊彦のキリスト精神を継承していきます。

今年も多くの方々を支えられ祈られて歴史を刻んできたこの創立記念日(12月24日)にイエス団報第20号を発行することができる恵みに感謝するとともに、イエス団に連なる皆さんのご理解とご協力に感謝を申し上げます。

イエス団報編集委員会